

// 卷 頭 言 //

日本ライトハウス視覚障害リハビリテーションセンター
所長 津田 諭

先日、大阪府眼科医会主催の「目のすべて展」に参加する機会を得た。目のすべて展は、毎年、目の愛護デー（10月10日）を記念して、一般の人たちを対象に開かれるイベントで、今回で42回を数えるそうである。2日間にわたるこのイベントの目玉は、最新の眼科医療に関するテーマ別講演と眼科医が無料で応ずる個別相談である。

会場は講演を熱心に聞き入る人たちで一杯であった。講演では、白内障、緑内障、糖尿病性網膜症、黄斑変性、その他の網膜の病気といったテーマごとに、専門医がつぎつぎと立って、病気の機作や最新の治療法についてわかりやすく説明してくれた。一例を挙げると、最新のフェムトレーザー光切開の手法を白内障手術に応用することで、切開する位置を機械が自動的に計測し、角膜や水晶体前囊の切開を安全で確実に行えるようになったそうである。この装置はカタリスレーザーシステムというそうだが、高価な手術装置で、まだ大阪府内でも数か所しか配備されていないとのことであった。この装置を使用すると手術する医師の腕の良しあしがほとんど関係なくなるそうである。また、挿入するレンズにも単焦点眼内レンズと多焦点眼内レンズの2種類があり、前者を装着すると老眼鏡が必要になるのに対し、後者を使うとコンタクトレンズと同じように眼鏡が要らなくなるそうである。技術の進歩には驚くばかりである。

緑内障や糖尿病性網膜症は失明原因の上位に入る病気であるが、これらの分野でも手術法や点眼薬がどんどん進歩しているそうである。演者の先生は、緑内障は初期に治療を始めれば視力低下にいたることはないし、糖尿病性網膜症も糖尿病のコントロールさえできていれば、視力低下を招くことはないと言い切られていた。

こうした最先端医療の話に「いや、すごいな」と感心しつつも、一方で昔、利用者が治療の傍らで苦しんでいた様子が思い出された。緑内障に苦しみ、何

度も手術を重ねてとうとう見えなくなってしまった人、また、眼圧が高く、眼が痛くてしょうがないと摘出に踏み切った人。「今だったら、そんなことにはならないのに」とやりきれない気持ちになった。

その当時はインフォームド・コンセントという言葉もなかった時代であった。医師からは病名が告げられず、今後の見通しについても説明がないままに、将来見えなくなってしまうのではないかという不安な心うちを吐露する人も多かった。説明がなかったのは、網膜色素変性症のように治療法がない眼疾だからとか、医師がうまくいかなかった治療経過を告げたくなかったからではないかと、他人事ながら勘繰りたくもなったものである。そうした人たちの中には、藁をもつかむ気持ちで、東に名医がいると聞けば飛んでいったり、中国の鍼治療が効果あると聞けば、上海に長期渡航して治療を受けることもいとわない人もいた。努力が報われた場合はいいが、時間とお金を空費した挙句に、自ら、もう眼は回復しないのだと悟って、われわれの所へ相談にくる人も多かった。当時は、もっと眼科医は告知に努めるべきではないかと思ったものである。

今ではさすがにそのようなケースは少なくなった。「治療法や薬の開発は日進月歩」と熱心に語る先生方の話を聞きながら、「でも、ここに日本ライトハウスが参加しているのは、まだまだ治療がうまくいかずに視覚障害に苦しむ人が存在することを眼科医自身をご存じだからではないか」と自らに言い聞かせた。

眼科医の中には、ロービジョンケアやリハビリテーションに関心を寄せる先生も増えてきている。医療と福祉の連携も、関係者の努力でようやく日の目を見るようになってきた。私たちも一層、医療との連携を深めていかなければならないと改めて感じた一日であった。